

(図上部のせりふ)

右

菊のまへ

瀬川菊之丞

イエ なんぼそのやふに
ふたゝびあわふのそはれる
のといさぎよふおつしやつ
てもまことしからぬ
身の御かくごうちじにと
しりながらなんと見
すてゝいなれふぞ
いづくまでもおとも
していくるともしぬる
ともいつしよでなけりや
わしやいや むごひ
つれないおこゝろで
ムリ升わいな

中

コレ うばハテさてふしぎな
かほせまひ惣じて老女は
おゝなといひ又うばともよぶ
こよひ忠のり卿のおやど申せし
御ほうびにこれを遺すそれとも
わか 敷錦のかたそでとしよりが
もろふてゑきなしと思はゞほかに
ほしがる方もあるべしこれも
其人のかたみと思へども
なをなつかしき
そでのうつり香と
いふ哥の心ナ
其方がみゝに
ソレきく

のまへ

よくござる

ゑてお

うけ申せ

岡部の六弥太

市川團十郎

左

我よみ哥を

わがふでの願ひも

あだはなならぬ

しるし御ほうしの

山ざくらハアゝ忝し

てきみかたとへだつれば

打すておかるべかりしを

思ひよらざるよしつねの仁心

にて哥人のかづにくはゝり和哥

のほまれを残す事せうかひの

ほんもうしゝても忘れぬ悦びぞや

さつまの守忠のり

澤村源之助